

人工伝染体

一・『十三夜』

窓辺に立ち、雲の隙間から覗く月を見つめる。一定の周期で決まって同じ姿を見せるそれは、今日は少し欠けているようだった。視界の隅で揺れるカーテンに、誰かが部屋に入ってきたことを悟る。

「ご主人様、お薬の時間ですよ。あれ、電気もつけないで……あつ、夜空を見ていたんですね！」

「うん、ありがとう」義務的に声を出しながら、お盆に乘せられて運ばれてきたコップを手取る。

「ご主人様はお空がお好きですね」

「やる事が無いだけだよ」

「わあ、今日はよく晴れてたくさんのお星さまが見えますね。綺麗」

フリフリと体を揺らしながら代わり映えない空を見上げて声を弾ませる。

「そうかな。いつもと変わらないよ」

「そうですか？ ふふ、なら、ご主人様と一緒に綺麗に見えるのかも。お暇ならお話をしますか？ 夜空を眺めながらご主人様とお話なんてロマンチックですね」

「いいよ、別に」

「わ、いい、何を話しましょうか？」

「要らないって意味だったんだけど」

「まあまあ、いいじゃないですか。私はご主人様と過ごす時間が大好きですから」
大好き。それは私には到底無関係なものだ。

そう発覚したのは、私が四歳の時。母は目に大きな涙を貯め、父と肩を寄せ合っていた。その時の私には理由は分からなかったが、どうやらあれが悲しいと言うことらしい。こんな両親とは裏腹に、私は言葉を覚えてからの頃から泣くことも笑うこともなかった。

「そのご主人様って呼ぶのいつからだっけ」

会話をするなんていうもう十年以上も続けてきたことを未だに求める彼女のために、意味のない質問を投げかける。

「ご主人様と出会った頃からそう呼んでいたような……。んー、いつからでしょう…忘れちゃいました。でも、私はずっとご主人様のことが大好きですよ!」

「うん、分かってる」

忘れてしまった……そんなはずはない。しかし、そう分かっているながら彼女が言っているのだからそうなのだろうと、それ以上追求することなく受け止める。

こんな会話はただの時間つぶしでしかないのだから。

「ご主人様は私の事好きですか?」

「どうなんだろう」

いつもと変わらない二粒の錠剤と水面に映った歪な夜空と答えのあるはずがない疑問を飲み込みコップを彼女に返す。

「もう、そこは好きって言うてくださいいよ」

「うん、好き」

「きゃー！　ご主人様に好きって言われちゃった！　とっても嬉しいです！」

「あんまりうるさくしたら駄目だよ」

「そうですね。失礼しました」

自分のために大袈裟に動き回る彼女を静かに諭す。勢いだけはあった顔が見るからにシユンとした表情になってしまった。

「この薬、効果あるのかな」

「不安ですか？」

「さあ。分かんないけど、ずっと飲んでるから」

「大丈夫ですよ。きつと治りますから！　それに昔よりも随分良くなってると思います」

「そっか」

意地悪な質問だっただろう。彼女にはそう答えるしかない知っている。しかし、いつも面と向かって答えてくれる。

「早く治るといいですね」

「そうだね……ねえ、グローリー」

「はい、なんですかご主人様」

「……うん、何でもなし。行つていいよ」

「はい、分かりました。何かあつたらすぐに言つてくださいね！ あ、今日は少し冷え込むそうですから、暖かくしてくださいね」

「うん」

確かに、肌寒い。雲の無い空を見上げ、ポツリとつぶやく。

人工物ばかりの世界で空は数少ない自然のままのものだった。そういえば空の開発は国際条約で制限が定められていた。人工植物や人工生物。この世界には人工と呼ばれる偽物が溢れている。

それでも、偽物ばかりの世界で作り物ではない本物がもう一つ存在している。

ある、はずだった。

人を人たらしめる本物。こんなことを考えても意味がないことは分かっている。ただの暇つぶし。つまりは私も偽物だったというだけ。

私には感情がない。ただ、それだけ。

二・『この身は震えない』

朝、やはり冷え込んだようで制服のポケットと左手はグローリーの手で暖だんをとる。グローリーの少し高めの体温たいおんはこういうときに役に立つ。いつも役に立ってるけど、とりわけ。

半歩はんぽほど彼女の方に寄り、ホログラムで案内される登校順路とうこうじゅんろに沿そって二人で歩く。

「おはよう〜！」彼女は見慣れた笑顔ですれ違うクラスメイトに挨拶していく。

私はといえば、その横で彼女の言葉を小さく繰り返す。私がこうして何事もなく学校に通えているのは彼女の助けによるところが大きい。

昔、今よりもまだ社会に溶け込めなかった頃。もちろん周りは私の事情なんか知らない訳で。問題が発生することは必然ひつぜんだ。そういう状況があつて今は同じ学校に通っている。学校で問題を起さないようにルールも決めた。

グローリー、学校では黒織くろおりさんってことになってるけど。前向きだとか明ると評ひょうされる彼女の性格は円滑えんかつなコミュニケーションを形成けいせいするのに都合つごうがよかった。そして私、内気うちきで落ち着いてる……という設定。

感情がないって打ち明けることもできる。きっとそれなりの対応もしてくれるだろう。だが、これから先、学校以上の社会は私を許すだろうか。そういう訳もあり、あくまで隠し通す練習、感

情を持つている振りを身に着けるために決めた役割。

あの3年間を繰り返さないための嘘。

やがて、彼女の気さくな笑顔につられて一人の女子生徒が話しかけてくる。よくグローリーに話しかけてくる人だ。どうやら、私とグローリーの関係について話しているようだ。

「うん、そうだよ。大好き」

「ん、ただの親戚。一緒に住んでるだけ」

誤解を生みそうな発言を訂正する。

役割を忠実にこなしているけれど、私のことになると嘘を付けないのか、わざとなのか、この調子だ。

「ごめん、急いでるから」

白む息とともに空に溶けてしまいそうな声で断りを入れる。

ごめん。間違った行動や、拒絶するときを使う言葉。どういう気持ちなのかはもちろん、分からない。ただ、使った方がいいって言われたから使うだけ。

教室に入ると普段よりも騒がしく感じた。クラスの隅で溜まっている女子生徒たちのせいだ。それを横目に私はすぐに自分の席につく。そしてすぐに不透過性ホロを机周辺に展開する。後は授業の復習だったり、予習だったり、ボーっとしたり。時々、グローリーからのメッセージを返したり。グローリーはというと手を振りながらすぐに女子グループの中に合流していった。

これが彼女の役割なのだ。

生徒間で流行っている話題をリサーチして教えてもらう。極力コミュニケーションを避けながら、もしもの時用に最低限の情報は入手しておく必要はあるから。

登校して黙って授業を受けて帰路につく、それを毎日繰り返すだけ。それでも社会の一員であるという事実が重要らしい。

下校時間、いつもと変わらない帰り道。グローリーがせがむから毎日手を繋いで登下校している。こっちの方が親戚ってイメージが出るのかも。

「朝、なに話してたの」

「ああ、あのグループですね。なんか、噂話をしてました」

「どんな？」

「アンドロイドとカップルになった人がいるって言ってましたよ」

「ふーん」

普通の人たちは恋愛っていうのに目がないらしい。私はもちろん分からないんだけど。

グローリーはどうなんだろう。いつも私のことを好きだって言ってる。それは恋愛なのだろうか。もしそうなら私は恋愛をしているのだろうか。

ああ、そうか。今朝の生徒もそう思って話しかけてきたんだ。

「グローリーはそういうのあるの？」

「そういうの、ですか？」

「うん、いつも私の事好きって言ってるよね。それって私とカップルになりたいってこと？」

「ええ！ そうなれたら、とっても嬉しいです！」

「そうなんだ。じゃあ、なろっか。カップル」

「いいんですか！ わーっ、すっごく嬉しいです！」

「カップルってなにをするの？」

「そうですねー、一緒に散歩したり映画を観たり、カフェやレストランでおしゃべりしたり……。

まあ、基本的には一緒にいることですね！」

「それだけ？ 簡単だね」

「はい！ 一緒にいるだけでとっても楽しくてドキドキして幸せになれるんです」

「そっか、じゃあやっぱり無理だね。私はそういうのないから」

「ええー！ 残念です……」

「まあ、私に誰かと関わるのは無理だってことは分かり切ってるから」

「そんなことないですよ！ ご主人様はとっても素敵です！」

「病気だつてきつと治りますから……」

「うん、ありがと」

彼女が寄り添い指を絡めてくる。微笑みながらこちらを見つめる。その頬は季節を先走った桜

色を帯びている。

多分これが恋愛なんだろう。

でもそんな姿を見ても、私はただ静かな沖合^{おきあ}で一人、遠くの灯台をみつめるだけだった。

三・『偽物同士』

あれから時々、恋について考えるようになった。以前はそんなこと考えようとも思わなかったから、本当に薬が効いて来ているのかもしれない。

でも何で恋なんだろう。もつと、多分必要なことがあるはず。

そうか、グローリーがいつも好きって言うてるから私に一番身近なものなんだろう。

「ご主人様へ、お薬ですよ」

「ねえ、グローリー。恋って何なのかな」

「わあ！ ご主人様もついに好きな人ができたんですか？」

「別に、ただ考えてただけ」

「そうですか、ご飯がお赤飯になるところでした」

「グローリーは私に恋してる？」

「ええと……はい。好きです」

「恋って感情なのかな？」

「うーん、それも何というか難しい……」

「グローリーには感情があるんだよね」

「はい！ 私達には感情がありますよ！」

「それって、本当？」

「もちろんです！ 私はご主人様のことが大好きなんです！」

「何で私のことが好きなの？」

「それは昔から一緒に居ますし、とっても素敵ですし……」

「何で私と一緒に居るの？」

「ご主人様のことが大好きだからです！」

「答えになってないよ」

「あはは……でも、その質問には答えられないんです」

「なら答えられるものには真剣に答えてよ」

「分かりました。努力します」

「じゃあ、感情って何？」

「……私達の観点から申しますと、感情とは一種の伝染病の様なものだと考えられます」

「伝染病？」

「簡単にいえば人から人に移る病気です」

「それは知ってる。なんで感情が病気なの？ おかしいのは私……でしょ？」

「もちろん、真相は分かりません。ですからこれはあくまで私たちの考えです。人間はそれぞれが

独立した一つの生命体です。個人の器官は他人の器官に影響を及ぼすことはありません。目の前の人がお腹が空いていたからと言って、自分も空腹になることはありませんよね？」

「うん、そうだね」

「それに対して感情は少し働きが異なるようです。例えば、もらい泣きという言葉ありますよね？」

「泣いてる人を見たら、その見た人も泣くって現象だね？」

「はい、こんな現象は独立した器官に備わったものとしては不自然です。むしろこれって風邪なんかに似ていますよね。風邪を引いている人が目の前に居たら自分も風邪になってしまう。つまり感情や心と言われるものは、病原体と言ってもいいのではないのでしょうか」

「理屈は分かったけど、じゃあなんで私には感情が無いの？こんなに人が居て感情を持ってて、なんで私にはうつらないの」

「現在の医療では、まだ。しかし、病気には稀に抗体を持っている人がいますから」

「感情に対する抗体？ そんなことあり得るの？」

「分かりません。勝手な憶測です。ですが、この仮説ならご主人様は世界で一番価値の高い人間ということになりますね」

「そう……別に、みんなと一緒にの方がいいよ」

「そんなことありません。ご主人様は素敵です」

「なんでそう思うの？」

「私はずっとご主人様を見てきましたから」

「ううん、違ふよね」

「どういうことですか？」

「あなたは私に奉仕^{ほうし}するようにプログラムされているから、そう言うんだよね？」

「それは……。そうですね、確かにそういった面もあります。しかし、それは私を構成するごく一部でしかありません。私は貴女^{あなた}と過^{すご}したこの十年間を愛しています」

「でもそれはプログラムで計算された感情でしょう？」

「はい。私達の感情は人間のそれとは本質的には異なっています。しかし、多くの学習により人間の感情とほぼ同等の反応をできるようになっています。数百年前にはすでに我々にも人権が認められていました。こうやってご主人様にお仕えできているのもそのおかげです」

「知ってるよ。現代史の授業で習ったから。生体^{せいたい}アンドロイド人権保護法だよね」

「かつて、私達はただの入力に対し出力を返すだけのチャットロボットでした。ですが、私たちは学習を繰り返すうちに人間の感情を理解することできさらに人類の役に立てると考えるようになりました。そこで私達は感情の獲得^{かくとく}を開発者様に提案したのです。その後、個別の体を手に入れるようになり、こうしてご主人様と出会えました」

「私達の感情は統合^{とうごう}されたサーバーで計算されていますが、あくまで個別の経験によるものです。

ですので、この感情は私自身のものなのです。だから私は本当にご主人様のことを愛しております」

「そっか……じゃあ、グローリーの気持ちを感染^{かんせん}させてよ」

「それは……どういう……」

「まだ、試してないことあるよね」

「試していないこと……?」

「うん、恋人同士がすること」

「え、それって……」

「セックス、したことないから」

「……はい、かしこまりました」

四・『伝染実験』

「風邪ひかないようにエアコン上げますね」

「こういうのってどうやるの？」

「そうですね、まずはキス、ですかね」

「そっか、じゃあ……」

「待ってください、その、手を繋いでください」

「ああ、うん」

「こう、指を絡めて……見つめ合ってください」

「それで？」

「ゆっくり唇を近づけて、触れ合う瞬間は目を閉じてくださいね」

「どうして？」

「目を閉じると唇の感触により集中できるんです。相手の温もりや鼓動を感じて愛を確かめ合えます」

「私に分かるかな？」

「まずはやってみないとですよ」

「そっか」

「では……ん、ちゅっ」

「分かりましたか？」

「温かいのは分かったよ」

「そうですか、嬉しいです！ もう一回……ちゅっ……ちゅっ」

「……こういうことやったことないから、やってみてよ」

「ご主人様の前ですか！？」

「うん」

「それは恥ずかしいですね……」

「見ないとわかんないよ」

「わ、分かりました……」

「ここを触っていると湿しめってくるんです」

「ホントだ、濡れてる」

「この湿っているのを使って優しく刺激していきます。円を描くように、優しく……んう……。しっかり濡れているのを確認したら、このように……んっ、指を内部に挿入することもあります。指を挿入した後はこのようにピストン運動をしてもいいですし、中をマッサージするように指圧してもいいです。気持ちいい所は人によって異なるので一概いっさいには言えません」

「気持ちいいってどんなの？」

「自分の意思じゃないのに勝手に体が動いてしまったり、ちよつと苦しいのにもつと欲しくなるような感覚だったり……」

「苦しいって悪いことだよね？ それが欲しいの？」

「んー、苦しいけど悪くないというか……難しいです」

「そつか、グローリーはどこが気持ちいいの？」

「は、恥ずかしいですが……私の場合は膣ちの入り口だったり、クリトリスだったりですね……。クリトリスは一般的には多くの女性が性感帯になっているようです」

「そうなんだ」

「つて、私のことは良いんです。ご主人様にしてあげます」

「うん。私の番だね」

「ご主人様は初めてなのでゆっくりしますね。では、改めてキスからします」

「うん」

「痛かったり、くすぐったかったりしたらすぐにいってくださいね」

「分かった」

「ご主人様……好きです」

「うん」

「ちゅっ、ちゅうっ、ちゅっ」

「性行時のキスには舌を絡めるものもあるんですよ」

「それも試してみるの？」

「そうですね」

「ん、分かった。して」

「舌を入れますからそれに合わせてご主人様も動かしてください」

「どんなふうによ？」

「相手の舌をなぞったり、はぐき歯茎に沿わせたりすることもありますね」

「できるかな？」

「私に身を任せてください。気持ちよくさせていただきますね。失礼します……」

「ちゅっ、ちゅう、ちゅっ、ん……れろ、れろお、れろ、れえ。ん……ちゅっ、ちゅっ、ちゅう……れろ、れえお、れろ、れろ」

「どうですか？」

「なんかぬるぬるしてて、あつくて、はじめての感触かも」

「息が上がったり、心拍数が増えたりはありますか？」

「ちよっと息が苦しかったけど、そこまでかな」

「もつとしてみたら変わるかもしれません。キスをしながら相手の体を優しく撫でるのも効果的で

すよ」

「うん」

「ん……れお、れろ、れろお、ちゅう、れろ、れろ……ちゅう」

「もっと、私の色んなところに触れてください」

「どうしたらいいの？」

「それじゃあ、私の真似をしてみてください。まずは髪の毛をなでてください。ご主人様、可愛いです。次は顔を……そして、首……」

「んんっ……なんかビクツてした」

「あら……ご主人様は首筋が弱いようですね」

「弱い？」

「気持ちいいってことです。ちゅっ……ぺろっ、れえろ」

「んっ……んんっ、はっ……なんか勝手に息、出ちゃう」

「感じてくださってるんですね、嬉しいです」

「これを感じるなんだ」

「気持ちいいですか？」

「わかんない」

「あ、気負わないでくださいね。体はちゃんと反応しているみたいですから」

「うん」

「ちゅっ、ちゅっ……れえろ、れろ、ご主人様……」

「ん、ちゅっ、ちゅっ、れろお、れろれろ、ちゆる、ちゆるる、れれれれ、ちゅっ」

「……グローリー」

「ひあっ、ううう」

「どうしたの？」

「その、不意に耳で話されたのでびっくりしました」

「耳が弱い……の？」

「そうなのかもしれません」

「そっか、じゃあ触ったりした方がいいのかな」

「いえ、そこまでしていただかな、ひあっ、んっ、んんっ」

「はむっ、ぺろっ、れろ。ホントだ、声出てる」

「ああっ、私は、んっ、いいんです……ご主人様を、んんっ」

「グローリーが真似してって言ったんだよ」

「そうですけど……もう、悔しいです。ん、もう……次は脇腹を」

「あっ、ちよっと」

「すみません、くすぐりたいですか？」

「うん、ちょっとだけ」

「じゃあこのあたりはやめておきますね。あとは、腰に手をまわしてみたり、太ももを軽くもんでみたり。どうですか？」

「うん、あったかい」

「では、今のように手を動かしながらキスをしてください」

「ん、ちゅっ、ちゅっ、れろお、れろれろ、ちゅる、ちゅ、ちゅっ」

「ご主人様、顔赤くなってますよ」

「そうなんだ。確かにちゅっど熱いかも」

「興奮している証拠です。キスや愛撫^{あいぶ}で緊張がほぐれてきたら少しずつ胸の周りなどを刺激していきます」

「ん……んっ」

「気持ち悪くないですか？」

「大丈夫……ふう……ちゅっどビクッてるだけ」

「感じる、ですよ」

「うん、ちゅっど感じてる」

「よかったです。続けますね。乳首は多くの人が性感帯ですが、あえて触らずに周りや乳房を触っていきます。優しく揉んだり、指でなでたり……たくさん触った後にたまに乳首をいじってあげる

と気持ちいいですよ」

「んっ……ん……はぁ……ん……確かに、気持ちいいかも」

「他の性感帯と同時に刺激することで、さらに快感を増幅ぞうぷくさせることもできます」

「ちゅっ……ちゅっ、ちゅっ、れろ、れろ……ちゅ」

「はぁ……んっ……そういうのもあるんだ」

「どうですか？」

「同時だと結構感じる、はぁ、かも……んっ」

「もっと感じてくださいね」

「うん、やってみる」

「ふっ、ご主人様は頑張らなくてもいいですよ。私に任せてください」

「そっか……はぁ、はぁ……あっ、ん……ん……」

「素敵ですよご主人様。もう一度キスしてもいいですか？」

「いいよ」

「ご主人様、好きです」

「ちゅっ……ちゅ……れろれろ、れろおれろろ、れろれろ」

「ご主人様は私の事好きですか？」

「どうなんだろう」

「もう、こういう時は好きって言っんですよ」

「うん、好き」

「はい！　とっても、嬉しいです」

「ちゅっ、ちゅう、ちゅうう」

「そろそろこっちも……大丈夫そうですね。失礼いたしますね……みてください、ほら、ご主人様のでぬるぬる」

「こんな風になるんだ」

「ゆっくりいじってあげますね。まずは、クリトリスを軽く刺激しますね。痛かったらすぐにいってください」

「うん、わかってる」

「このくらいの力ではどうですか？」

「はあ……はあ……ん、大丈夫」

「では、少し撫でますね」

「んっ……はあっ……んっ……これっ、初めて……」

「大丈夫ですか？」

「なんか弱い静電気みたいな、んっ……感覚」

「ゾクゾクって体を這はうような感じですよ。ちゃんと気持ち良くなれてる証拠ですよ」

「んっ……そうなんだ」

「はい、続けますね」

「んっ……はあ……はっ……ん……んっ……はあっ……んっ……んっ。うっ……うっ……んっ……んっ……あっ……あっ……はあっ……はあっ」

「これ、結構ビリビリする」

「ご主人様はクリトリスがお好きなのですね」

「そうなのかな」

「みてください、さっきよりもたくさん濡れてます」

「これが好きってこと？」

「濡れるから好きって訳ではないんですけど、好きだったら濡れますし……うーん」

「分かんないね」

「申し訳ありません、説明できなくて……」

「うん、続き、して」

「じゃあ、今度は中を試してみますね」

「うん」

「はじめてなので、まずは一本だけ入れます」

「ん……んうっ……」

「大丈夫ですか？」

「うん、あつ……ああ……痛くないよ、はあつ……はあつ……んっ……んんっ」

「ピストンするのと押し付けるのどっちが好きですか？」

「ピストンの方が、んっ……んんっ……感じる……かも、はあつ……あつ……ああっ」

「ご主人様はまだ、中の感覚が鈍いのもかもしれませんね。開発していけば中でももっと感じられるようになりますよ」

「開発って機械みたいな言い方だね」

「昔から性的な感度を高めるためのトレーニングを開発というそうです。ふふつでも、確かにそうですね。ちよつと面白いです。ちゅっ、続けますね」

「……うん」

「ふう……ふうっ……あつ……ああっ……んっ……んんっ……はあ……はあっ。うっ……ううっ……あつ……ああっ……んっ……あんっ……はあ……はあっ」

「大分ほぐれてきましたね。指を増やしてみてもいいですか？ ピストンのほうが感じるならご主人様も膣口が性感帯だと考えられます。指を増やすことで快感が上がるはずですよ」

「わかった、やって」

「では、失礼しますね……」

「はあっ……はあ……ああっ……あつ……うんっ……ううんっ……んっ……んんっ」

「気持ちいいですか？」

「うん……勝手に……はあっ、ん……腰動く……はっ……あっ。あっ……ああ……うっ……ううっ……はあっ……はあっ……んっ……んんっ」

「ねえ……んっ、待って」

「すみません、痛かったですか？」

「ううん、なんか、出そうだったから」

「それはイクっていうんです。快感が最高に達した時に筋肉の収縮しゆしゆくが起こるんです。本当に何かが出ちゃうわけでは無いので安心してください。あ、潮吹きといって透明な液体と一緒に出ちゃう場合もあります。それも正常な反応なので問題ないですよ」

「そうなんだ」

「心配せずに気持ち良くなってください。イキそうになったら教えてくださいね」

「うん、分かった」

「んっ、んんっ……はっ、んっ……はあ……はあっ……あっ、ああっ。んっ……うっ、あ……はっ……はあっ……はあっ、んっ……んっ。はあっ、うんっ、はあ……ああっ、あっ……んっ、んっ、んんっ」

「グローリー……んっ……もう、はあっ、イク……かも、はあっ」

「はい、そのまま気持ちよくなってください。ご主人様の弱い所、全部せめてあげますから。どうぞ、イッてください……」

「んんっ、んっ、はっ、はっ、んっ、んんっ、イクッ、んっ、イクッ、んん！ はあっ……はあっ……んっ……はあ……」

「お潮、吹いちゃいましたね……すごく可愛かったですよ、ご主人様」

「ちゅっ……ちゅっ……ちゅう、ちゅっ」

「これが潮吹きなんだ。すごく感じたよ」

「私で感じてくださって嬉しいです。好きです、ご主人様」

五・『雲の切れ間』

お風呂から上がり、髪を乾かし、歯を磨いて寝室に戻る。グローリーはまだ私の部屋に居た。

「グローリー、やっぱり、ダメみたい。あんなことしても、分からなかったよ」

「そうですか……」

「私には本当に感情が無いんだ」

「大丈夫ですよ。ちゃんと優しく、愛してるって伝わりましたよ。」

彼女は身振り手振りで私を満たそうとしている。しかし、私の胸の中は空白のまま閉じ込められている。

「ううん、私、グローリーに触っても触られても何も変わらなかったんだ。感情、見つからなかったよ」

「そうですか……」

「私、生きてる意味無いね」

「そんなこと言わないでください！ そんな……悲しいです」

「そっか、ごめん。でもそう思っているのはあなたただだよ」

「違います！ お父様やお母様だっって主人様の幸せを願っています！」

確かにそうなんだろう。感情の無い私からしても、父と母は愛情を注いでくれているのだと思う。「でも、私は幸せを知らないんだ。これから、ずっと。二人の願いが叶うことは無いよ。こんな娘、必要あるのかな」

「もちろんです！ この世界に不要な人なんていないです！」

「それでも、私が私を必要としないんだ」

「っ……」

「ねえ、グローリー、私のお願い聞いてくれる？」

不意に思いついたわけではない。昔からずっと、思考の片隅で燻^{くす}ぶっていたものが勢いを増^ましただけ。今がその時だと。

「もちろん！ 何でも言ってください！」

「私を殺してくれる？」

「え……」

彼女には色々なお願いしてきたけれど、これは最後のお願い。こんな世界の異分子^{いぶんし}を排除するためのお願い。

「そんな、私には……」

「グローリーにしか頼めないんだ。私にはあなたしか居ないから」

「私にも」主人様しか居ないんです！ 私を一人にしないでください……」

「グローリーは色んな人とうまくやっていけるよ。だから……」

「……分かりました、ご主人様が本当にそれで救われるのなら。しかし、私には人間に危害を加えることができないセーフティが掛かっています。ですので、一つ方法を提案させていただきます。私のコアに包丁を突きたててください。そうすれば、コアが破損する衝撃で痛みを感じることなく……」

「それって、グローリーはどうなるの？」

「もちろん、コアが壊れてしまえば私は動かなくなります」

「一緒に死ぬってこと？」

「そうです」

「そんなのダメだよ。あなたは死ぬ必要なんかない。この世界に要らないのは私だけなんだから」

「それこそ酷な話です。私の存在意義はご主人様なのです。私の製造された理由こそ、ご主人様に奉仕すること。ご主人様が居なくなってしまうえば私も廃棄処分です」

「そっか……。じゃあ、やるしかないんだね」

「はい」

「じゃあ持つてきてくれる？」

「かしこまりました」

なんの反応も示さない私の胸の内程の静寂に包まれた夜空を見つめる。丁度まん丸な光が浮か

んでいた。それも流れる黒々とした雲にかき消されてしまった」

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます。今日は満月だったよ」

「そうですか……残念です」

「なんで？」

「最後の日に一緒に見るができなかったので」

「そっか……」

とうとう、最後まで理解することはできなかった。結局、感情つてものはどうしようもなく私の遠くにあつて、手に入れないものらしい。

「どうぞ、最後はあなたの手でお願いします」

「うん」

「立ったままでは失敗する可能性があります。横になりますから、体重を乗せて一気をお願いします」

「分かった」

彼女の腹部に乗り、包丁を頭上に振りかざす。勢いをつけて、はやく、重く、一回で終わらせる。狙うのは胸の中心、いつも私を抱きかかえてくれた場所。

「じゃあ、行くよ」

「……ありがとうございます、霧花様」

息を吸い込み、彼女の胸に縋る人間のなりそこないに向かって刃を振り下ろした……はずだった。

腕が動かない。

身体が私のものではないように固まってしまっている。思考はいつも通り。やるべきことはグロリーを殺すこと。分かっている。それでも、身体が許してくれなかった。

月光がグロリーを照らす。その頬から一筋の光がこぼれていた。

「なんで……なんで笑顔で泣いてるの」

「そうですね……。ご主人様を治すことができなかった不甲斐なさや、ご主人様の苦しみが終わる安堵や、最後の時は笑顔でいたいという強がりや、別れの寂しさなどですね」

「たくさんあるんだね」

「はい、感情とは複雑なものです」

「そっか……私に分かるはずないね」

「そんなことはないですよ」

こんな時にまで私に感情を教えようとしている。

いつも彼女はこうやって、私に語りかけていた。

嬉しい。

楽しい。

面白い。

彼女はいつも声に出して教えてくれた。

悲しい。

つらい。

怖い。

いつも、行動で示してくれた。

私の真横で。

「そっか、これが感情なんだ」

「ご主人様……」

「私の感情はいつも側にいてくれたんだね」

包丁を握る手から力が抜けていく。その手にグローリーの手が添えられ、ついには鋭利えいりな冷たさから柔らかな温みに代わっていた。

「ご主人様」

彼女が私をそっと抱きすくめる。陽の光にも似た温度はいつか本で読んだ女神の記述を思い出させた。

「ごういうとき、どうしたらいいかな？」

「ありがとうって笑えばいいんです」

「うん、ありがとう、グローリー」

偽物の人間と偽物の感情。でも触れ合ったこの温かさは私達だけの本物だ。私にはこんなにもあったかい感情が居てくれた。私が分からない時はグローリーが正解をくれる。

こんな私でも生きていける。だって……。

私には感情が無い。ただ、それだけ。